

山梨県における狩猟者の実態把握 —アンケート調査に基づいて—

○三木敦朗（信大農）・大地純平（山梨森林総研）・小池正雄（信大農）

今日、野生動物と人間との新しい関係構築が求められている。シカ・イノシシ・クマ等の人里への出没は、人的・経済的被害を生じ、山村での生活継続を困難にして、いわゆる「限界集落」の最後の引き金をひく原因となっている。また、獣害対策の必要性が造林コストを引き上げ、この回避が長伐期化政策を避けがたいものとしていると思われる。

野生動物との緊張ある共生のためには、狩猟者の活動が重要となるが、ここでは高齢化・減少が顕著である。狩猟免許所持者に占める60歳以上の割合は約6割であり、一方30歳代以下は5%に満たない。若い狩猟者の減少は、野生動物対策を困難にするばかりか、狩猟技術・文化の断絶も意味する。どのような条件があれば、狩猟者は維持され、世代交代するのだろうか。

そもそも狩猟者については、民俗学的研究や、意識調査が部分的に行われているものの、定量的な研究が不足している。そこで、研究の第一段階として、狩猟者の現状を量的に把握することを試みた。

具体的には、山梨県において狩猟免許の更新講習を受講した2,013名の狩猟者に対し、講習会場（山梨県下の4森林環境事務所が実施）にてアンケート調査を実施した。回答数は1,446（71.8%）であった。調査期間は、2012年7～8月である。なお、調査にあたっては山梨県と山梨県猟友会の協力を得た。

主な調査項目は下記の通りである。

- ① 狩猟者の属性：性別・年齢・居住地・職業・山林と農地の保有状況・狩猟免許の種類・狩猟歴・狩猟の目的
- ② 狩猟の方法：主な猟場・狩猟のグループの有無（メンバー構成・若いメンバーの有無）・捕獲した鳥獣の解体や残渣処理の方法・捕獲した鳥獣の利用方法
- ③ 狩猟の成果：有害鳥獣駆除や管理捕獲への参加状況・出猟日数・狩猟の成果・売り上げ・出猟しなかった理由
- ④ 今後の見通しなど：狩猟を継続する年数・やめる理由・狩猟者の規模についての印象・地域外の狩猟者による狩猟の印象

以上の調査に基づいて、分析した結果を報告する。

キーワード： 狩猟者， 山梨県， アンケート調査

（連絡先：三木敦朗 mikia26@shinshu-u.ac.jp）